

松本清張記念館

◆館報◆

2013.8
第43号

『魏志』『倭人伝』の里数、日数は

まことにナンセンスなものである。



『古代史疑』
昭和43(1968)年3月
中央公論社刊

現在入手できる本
『松本清張全集』第33巻 文藝春秋

目次

- 松本清張研究会 第28回研究発表会…………… 2
- 開館15周年記念特別企画展
『松本清張と邪馬台国』…………… 5
- 展示品紹介…………… 6
- 点描 作品の舞台を訪ねて…………… 6
- 探検！ 清張記念館…………… 7
- 友の会活動報告…………… 7
- トピックス…………… 8

『古代史疑』は、昭和四十一(一九六六)年六月から翌年三月まで、『中央公論』に連載された。

作品紹介

松本清張は第二章の『大和か九州か(簡単な学説史)』で、まずわが国の邪馬台国研究の歴史を振りかえり、『魏志』『倭人伝』についての先学や研究者の学説をよく整理し、その発想法や相違点などを的確に押さえている。その上で自説を展開するため、森浩一氏や上田正昭氏ら専門家から『古代史疑』は(手固い学術論文)と評価された。

九つの章の中でも、もっとも独創的な説を展開しているのは、『魏志』の中の五行説と『一大率』『女王国以北』の章である。前章では「里程や戸数の記載は、虚妄の数字」と論じる。中国で、三、五、七の数字が特に好まれるのは、前漢時代に興った陰陽五行説に基いており、「倭人伝」の戸数も、狗邪韓国から邪馬台国に至る里数と日数も、陳寿によってこれが適用されたのであろう、と説明される。

後章では「一大率は魏の命をうけ帯方郡が派遣した軍政官」との新説を世に問うた。「自女王国以北、特置一大率」の文には主格が見えないことに注目し、省かれた主格は「魏Ⅱ帯方郡」だと論じる。この「一大率Ⅱ帯方郡派遣官」説については、清張は生涯をかけて考究し続け、補強の論を発表した。おそらくこの情熱こそが多くの読者を勇気づけ、広範な層をまさこんでの古代史ブームを惹起したのだろう。

清張は『古代史疑』で着眼の鋭い独自の説を発表し、邪馬台国論争に一石を投じた。その波紋は、(邪馬台国問題を大学・研究機関のワクから解放し、大衆のもの)にして、国民のあいだに拡がっていった。

(学芸担当主任 中川里志)

松本清張研究会 第28回 研究発表会

平成25年6月1日(土)午後2時 明治大学

戦前の蔵書

清張先生は考古学に非常に造詣が深く、勉強の深さは大したものだと思います。松本清張記念館に清張先生が戦前蔵書印を押した本が残っていることを最近知りました。その中に、私の恩師の後藤守一先生の『日本考古学』と國學院大學の大場磐雄先生の昭和十年の概説書『考古学』という本がありました。これらの本で勉強されたのです。

最初の出会い「風雪断碑」

清張先生との最初の出会いは、私個人としては例の「風雪断碑」(のちに「断碑」と改題)です。考古学者で、三十二歳で結核で亡く

なった森本六爾、その奥さんの三十一歳で亡くなったミツギ夫人、このご夫婦の人生を題材にお書きになった本です。私も昭和二十何年か、「別冊文藝春秋」で読んでショックを受けました。私だけではなくて、全国で考古学を勉強していた若手研究者は、違いはあっても、非常に感動したと思うんですね。

森本六爾は肺結核のために京都大学の考古学研究室の出入りを差し止められたと聞きましたが、彼自身の人柄もあつたのでしょう。かなり個性の強い研究者で、京都大学でも東京の上野の博物館でも就職ができなかった。しかしその学問的な系統は、京都大学の小林行雄とか諏訪にいた藤森栄一、明治大学の杉原莊介など、当時二十一、二歳の若い、在野の考古学研究者に非常な影響を与えて、後の「東京考古学会」を創った。その生涯を清張先生がお書きになった。すばらしいなと、この作家はすごいなと思いました。

シンポジウムで知った清張先生

松本先生とは数回、シンポジウムを一緒にしました。それでまず分かったことは、清張先生が大変な勉強家であるということ。特に考古学には非常に関心をお持ちだと知りました。また『魏志倭人伝』や邪馬台国論になると、ものすごく熱を帯びて、熱心にいろんな発言をされました。

例えば、あるシンポジウムでのこと、午

前の部で清張先生が司会をされて、しかもテーマが三角縁神獸鏡でした。十年ほど前までは、『魏志倭人伝』に出てくる魏の皇帝の鏡だろうと言われてきました。このごろはクスチオンマークになっています。清張先生は午後もこの三角縁神獸鏡でいこうと言われる。ところが、東京大学の井上光貞先生は文献の方の先生ですから、考古学的資料を扱うのはもう午前中で十分、「午後はおれは三角縁神獸鏡はやらん」と言われる。お二人が進行上の意見の違いで、控室で相当にはげしく口論されているところを実際に見ました。

とにかく、松本先生の発言は、考古学研究者の胸をぐざりと刺すような発言が結構ございました。

清張先生の邪馬台国説

「卑弥呼は殺された」 「一大率は帯方郡が設置した」

『魏志倭人伝』に「卑弥呼以つて死す」と書いてあるのは、「殺された」んだと言われる。我々は卑弥呼は老婆で年取つて死んだと簡単に思っていたが、清張先生は狗奴国との戦いに敗れて責任をとらされて「殺された」という発想で、『魏志倭人伝』を理解したわけ。そういう点では、考古学の研究世界にくさびを打ち込んでいかれた。多々そういう点がございました。

もう一つ、『魏志倭人伝』に、伊都国、今の福岡県の糸島市に、「一大率」という役所を置いたとある。従来古代史や考古学では、大和政権、あるいは邪馬台国が置いたと言われている。ところが、清張先生は、朝鮮半島の帯方郡が倭国に「一大率」という拠点を置いたんだ、とまったく発想が違うんで

すね。これは、かなり検討して見るべき意見ではないかなと思つています。

また、清張先生は「大塚さん、前方後円墳というのは、どこが正面なの？」と聞くんですね。考古学の我々が当たり前と思つている、あの江戸時代に蒲生君平が創った「前方後円」は本当にそうなのかと疑つていんです。そういう点は作家としての鋭い閃きであり、「前方後円墳」という言い方を鵜呑みにしないで、一度疑つて批判的にみる、そういうところがありましたね。で、私は時代によつて違つたと答えました。古い前方後円墳はやはり低くて突出している前方部が正面である。ところが、五世紀の後半からは側面が正面になる。前方後円墳では、埴輪も表側はきれいにびっしりと並べているのに、裏側は三メートルとか四メートル



講演
「清張先生のウラ・オモテ」
講師 大塚 初重

○明治大学 名誉教授

おきに関引きして並べている。つまり、古墳時代人には正面と裏という感覚が完全にあったのです。清張先生は早くからそういうところを見ていたのです。

「創作ノート」

ある日、「大塚さん、ぼくの『点と線』という作品は」と言われ、「あれは、朝日新聞の西部本社から東京本社に転勤になって、一週間目か十日目か、家に帰る途中」たしかお宅は中央線の沿線なんです。東京駅の中央線の一線線のホームに立って、振り返ったら、一番、二番、三番、四番、五番、六番、七番、八番、ずーっとホームに列車が一台も停まってない。「へえー、天下の東京駅のホームに列車が一台も停まってない、こんなことがあるのか」と思ったそうです。すぐ東京駅の駅員に訊ねたら、ダイヤグラムを見せてくれて、そういう時間が一日一回四十分間だけあると言われた。「そこから実は『点と線』のテーマを作ったんですよ」という話を直接、私は聞きました。

清張先生と私は十年間くらい、お付き合い合わせていただきました。考古学で知りたいたいことがあるときには、「大塚君、大塚君」と電話をかけてくれました。

清張先生には、アシスタントがたくさんいるという噂もずいぶん耳にしました。でも、そんなことはなかったようです。例えば、『朝日新聞』の夕刊か何かで、パリのシャンゼリゼ通りの裏通りのことを書くこととしたときに、あの店の隣は何という店だったか忘れた。そこで、『朝日新聞』の学芸部に電話して「すぐ調べてくれ」と頼む。すると、パリの支局に電話して、支局員を夜のその通りまで行かせて、店の名前を確認して電話を返す。作家の取材は命がけなん

ですね。だから、新聞社もそれくらいは協力しなきゃ。そういうふうには、担当編集者をアシスタントとして十分お使いになったようですね。

「ウラ」話

あるとき、朝日新聞社のシンポジウムが終わったあとに、四時半くらいでしたか。東大の西嶋定生さんや中国社会科学学院の王仲殊先生とかが出ていましたが、清張先生は「大塚さん、大塚さん」と私を呼び止めて、「ぼくと一緒にしてくれませんか」と言うんです。車で「銀座」に行きました。五時ごろの銀座のクラブなんてボーイさんが入り口に水をまいて掃除をしているくらい。ママもホステスさんもない。(笑)

で、「大塚さん、何でもあなたの好きなものを飲みなさい」というんですね。飲みたくないものと言ったって、私、焼酎くらいしか知りません。松本先生はと見たら、飲みません。すまね。コーヒードでした。私は、つましくちびちびやってみました。そして、六時ごろ、ママが来ました。そして、ホステスを呼んで、八人くらいそろったのが七時ごろでしょう。ホステスさんには好きなものを飲ませましたよ。先生の両脇には美人のホステスがびったり座って、先生はコーヒードで、いろんな話をしていました。お酒を飲まないで好奇心だけでホステスを相手にするのは、すごいなあと思いましたね。取材もあるし、やっぱり一流作家はそれなりの遊びが出来なきゃだめです。

私は一九六八年ごろ、イランのテヘランの郊外で例の拝火教、ゾロアスター教の遺跡を見ました。清張先生も見えていますね。清張先生はけんめいに現場を歩いている。クラブも現場で、文献の資料だけではなく

て、実際に自分の足で行って見て、現場で物を考えて、そして書いています。さすがだなあと思いました。

「締めくくり」

最後は、勝田市（現ひたちなか市）での講演会の話で締めたいと思います。会場は勝田市の市民体育館で、たしかウィークデーでした。ですから、お客さんは九割近くがご婦人で、大半が家庭の奥さんたちでした。話の最後のほうで、純文学の文豪と呼ばれる、例えば、谷崎潤一郎とか森鷗外とか坪内逍遙とかの名前を出して、こういう人たち

研究発表

発表者 尹 芷汐*

○名古屋大学大学院
文学研究科博士後期課程



時代の文脈から 『日本の黒い霧』を読み直す

— 日中比較を通して —

一 中国における松本清張の翻訳

中国における松本清張の翻訳と出版は、一九六五年の『日本の黒い霧』が最初でした。一九六三年、巴金ら中国の作家代表団が日本を訪問し、中国の国有出版社の人民文学出版社の編集者であった許覚氏はその時松本清張に会い、『日本の黒い霧』を寄贈されました。

(文藝春秋新社一九六二年「帝銀事件」、「下山事件」、「松川事件」、「白鳥事件」と「ラストウォーフ事件」、「謀略朝鮮戦争」に、「なぜ『日本の黒い霧』を書いたか」を加

の奥さんを調べてみると、みんな悪妻だというんですね。(笑)悪妻でない、文豪は生まれません、と私はそう思っています。松本清張先生はそう言い切りましたよ。そのとき、どこから「先生は？」という質問が上がったんです。「今質問がありました。私は文豪ではなく大衆文芸というかそういう作家なので、家内もまあまあそこそこのです」と答えたんです。大拍手でした。

松本先生は一時間半の講演のラストに、会場の観客の九割がたは奥様方だなど見ると、とっさの機転で「締めくくり」に文豪論、悪妻論をやって会場をわかせたんです。なるほど、さすがだなと思いました。

えた七章が収録されています。許覚氏は帰国後、同出版社の文潔若氏に翻訳を依頼しました。一九六五年に、中国で最初に出版された『日本の黒い霧』に、私が重要だと考える「謀略朝鮮戦争」は掲載されませんでした。翻訳者の証言によると、林彪が朝鮮戦争で負傷したという松本清張の記述が正確ではないため、翻訳者と出版社が同意した上で、「謀略朝鮮戦争」は掲載されなかったのです。

『日本の黒い霧』の翻訳は、中国の同時代の状況においてみる必要があると思います。一九四九年、共産党のもとで新中国が成立し、アメリカとの激しいイデオロギー的対立の中で、中国大陸のメディア報道は反「米帝国主義」の傾向が強まっていました。そして、当時の「人民日報」は、日本で起きた下山事件、三鷹事件、松川事件が「米帝国主義」による共産主義を鎮圧するための陰謀であると報道していました。

朝鮮戦争に向かう一連の怪事件を書いた『日本の黒い霧』は、単に占領期の「日米」の関係を描いた作品ではなく、冷戦下のアジアにおける日本の位置づけを考えさせる作品として読むことができると思います。一九六三年、松本清張が中国の編集者許覚民氏に他でもなく「日本の黒い霧」を寄贈したのも、清張がこの作品を日本の問題だけではない、あるいは日本以外の読者に読まれてもいいと考えていたかもしれせん。しかし、「謀略朝鮮戦争」が削除された結果、そうした作家の意図を『日本の黒い霧』から読むことが難しくなり、作品はアメリカによる占領を批判するものとなりました。

ただ、そうした結果は、中国の同時代のイデオロギーにもちょうど合っていたともいえるでしょう。「謀略朝鮮戦争」において、松本清張は「率直に言えば、三十八度線をどちらが先に越したか」ということは、時間の問題であったように思う。戦争勃発前、この境界線に沿って千回も小戦闘が起こっていたのはそのことを証明する」、また、「中国はアメリカのわなにひっかかった。正規軍を出す代わりに人民義勇軍という

名前のパルチザン部隊を大量に北朝鮮に投入したの
は賢明であつたと



「日本の黒い霧」(邦題「日本の黒い霧」)
文潔若訳(一九六五年 作家出版社) 清張所蔵

言わねばならない」と述べています。それに対して、中国は、「人民義勇軍」を朝鮮に送るのはアメリカの侵略から朝鮮を助け、そして朝鮮と隣接している中国の主権を守るためであると主張しています。こうした見解の違いもあるため、「謀略朝鮮戦争」は一九六五年の中国において、翻訳され、読まれることが難しいということも考えられます。

それに対して、一九八〇年代に再版された『日本の黒い霧』は、再び「謀略朝鮮戦争」を掲載しました。出版がより自由になった時代の空気がこの変化からうかがうことができます。一九八〇年代の松本清張の翻訳を見ていくと、おおよそ四つの分類ができると思います。「文学の消費の復活」と「抑圧された人間性を求めて、松本清張の小説の中で普通の人間を描いた作品を読みたい」という願望、また「日本映画ブーム」の中で読まれた『砂の器』がその一つ。

もう一つは、一九七〇年代から日中国交回復のあとに中国の大学で、日本語学部が再建されて、研究者たちが日本文学を研究する活動を再開しました。その中で、松本清張の「或る『小倉日記』伝」が翻訳されて、日本文学を研究する雑誌『日本文学』に掲載されました。また、群衆出版社(中国の公安部に所属する国宥の出版社で、警察関係の内容に係わる小説、あるいは参考書などを出版する出版社)が出版した『点と線』は、「警察が論理学の専門知識を以て刑事事件を解決する過程を描き、公安関係者に捜査と裁判に不可欠な論理的推理の方法を教え、読者の論理的思考能力を鍛える新しい文学ジャーナル」(孫軍悦、『Juncture』、二〇一二年)として翻訳されたのです。そうした中で、『日本の黒い霧』はやはり冷戦の東西のイデオロギーのせめぎあいの中に位置付けられ、「松本清張の作品の一部は、戦後米国占領軍が日本反動当局とグルになって国内外で犯罪を犯していることを暴露した。『日本の黒い霧』はこのような作品である」と論じられています。(趙徳遠、『日本文学』、吉林人民出版社、一九八三年)

二〇一二年、『日本の黒い霧』と『深層海流』が再版されています。再版をきっかけに、冷戦時代の東アジアを見直しながらこの作品を読み直す必要があるのではないだろうか。一九八〇年代とはまた違う時代的空気の中で、『日本の黒い霧』がどのように読まれて、評価されるのかを今後も注目していきたいです。

二 日本で『日本の黒い霧』を読み直す

日本において『日本の黒い霧』は文学作品より、ノンフィクション、つまり「歴史」として読まれる傾向が強いため、「事件の解明」に疑問が持たれ、「歴史」としての方法」が批判されてきたのです。今『日本の黒い霧』を読むとしたら、「歴史」ではなく、「文学テキスト」として読んでみたらどうかと考えたいです。

もう一つは、「東アジアの中の日本」、「冷戦下の占領期」、「高度成長期」というキーワードを意識して読む必要があると思います。松本清張自身、一連の事

件の最終の目的は朝鮮戦争の極点を目指し、そこに焦点を置いての伏線だったと書いています。だから、従来個々の事件に与えていた視線を変えて、「謀略朝鮮戦争」を焦点にして読んでみたらどうでしょうか。

作品の書かれた一九六〇年は、高度成長期が始まった時期です。「戦後」の問題が未解決なままで、政治的関心が経済的関心に切り替えられていく、という矛盾の時期だと思ふのです。さらに週刊誌時代とも言われるこの時代に、情報に対する認識は「論理」ではなく「イメージ」となっていました。そうした時代状況の中で、「黒い霧」事件を眺めている書き手(視点人物)の松本清張は、「情報」をもって「推理」する方法を読者と共有しようとしたと考えてもいいのではないのでしょうか。

文学作品として読み直すと、『日本の黒い霧』は占領軍による「怪事件」自体を書いたものではなく、日本がどのように朝鮮戦争の戦場および冷戦下の東アジアの中に取り込まれていくかという「物語」を描いた作品です。あるいはそうした「物語」を描いた作品として読まれてもいいと考えます。一九六〇年という時代の矛盾の中でどのように戦後という問題を見直すか、アメリカとの関係の中で日本の戦後が何をなしとげてきたか、日本の戦後を東アジアの関係図の中でどのように位置づけるか。こうした問題を一九六〇年代においても、今現在においても、我々に考えさせる文学テキストとして、『日本の黒い霧』があると思います。

松本清張と邪馬台国

—『魏志』『東夷伝』倭人条の謎に挑む

開催期間 平成25年8月1日(木)～11月4日(祝・月)
 場所 松本清張記念館地階 企画展示室
 入場料 一般 500円 中高生 300円
 小学生 200円 ※常設展示観覧料に含む

古代史家の門脇禎二氏は『清張古代遊記 吉野ヶ里と邪馬台国』の解説で、松本清張説は今後の邪馬台国研究において〈必ず通過しなければならない関門〉の地位を占めていると評価しました。しかし何より、「清張通史1 邪馬台国」の文庫本が第30刷として現在も読まれ続けていることこそ、清張『邪馬台国』論の真の価値を伝えています。

本展では、清張『邪馬台国』論の全貌を紹介し、その魅力に迫ります。



『清張古代遊記 吉野ヶ里と邪馬台国』
 平成5(1993)年11月
 日本放送出版協会刊

『日本考古學』
 後藤守一著
 昭和15(1940)年1月
 四海書房刊
 清張が戦前に押した蔵書印付



I 《火》の条 — 「陸行水行」の世界

戦前、安心院を訪れた体験を活かして、松本清張は昭和38(1963)年、「陸行水行」を『週刊文春』に連載しました。〈推理小説は付け足し〉で、『魏志』『倭人伝』の距離、日数、方角の記事が〈学界や専門家の論争になっている〉ことを一般読者に紹介したくて書いたという。だが、思わぬ反響があり、邪馬台国ブームの発火点となりました。



文学碑と清張
 写真提供：文藝春秋
 昭和57(1982)年5月、清張は「陸行水行」文学碑除幕式参列のため、安心院町を再訪しました。卑弥呼祭が行われていました。



直筆原稿「豊前国安心院」
 「文藝春秋」昭和56年8月号に、
 巻頭随筆「安心院」として
 掲載されました。

II 《石》の条 — 「古代史疑」

「古代史疑」は、学説史をきちと押さえた〈手固い学術論文〉と評されました。独創的な「一大率＝帯方郡派遣官」説は生涯考究し続けました。その情熱こそが読者を勇気づけ、広範な古代史ブームを惹起したのでしょうか。



直筆原稿「古代史疑」
 昭和41年6月～翌年3月「中央公論」



「書庫」で本を読む清張
 写真提供：文藝春秋

「書庫」
 再現コーナー

清張蔵書
 『オリエンタリカ』1
 昭和23(1948)年8月
 東京大学東洋史学会編
 白鳥庫吉「卑弥呼問題の解決(上)」掲載



III 《燎》の条 — 「清張通史1 邪馬台国」

「茶の間に語りかける新しい日本歴史書」として、昭和51(1976)年、「清張通史1 邪馬台国」の連載は始まりました。現在もその文庫本が刊行されていることは、それが清張の願いどおり〈国民全部のもの〉となった証でしょう。約40年前、清張の放った燎原の火は今も燃えつづけているのです。



「清張通史1 邪馬台国」スクラップ
 清張所蔵
 単行本刊行準備のための原稿であり、
 清張自筆の朱書きが入っています。



「資料室」での清張 写真提供：新潮社

「資料室」
 再現コーナー

往復書簡
 「昭和50年2月25日付、
 藪田嘉一郎宛松本清張書簡」
 藪田夏雄所蔵
 邪馬台国問題について、清張は
 専門家と往復書簡を交わし、質
 問や自説の確認をしていました。



銅鏡 清張所蔵
 「四葉座鈕内行花文鏡」
 後漢時代



へき
 璧 清張所蔵

IV 《華》の条 — 邪馬台国シンポジウム

松本清張にとって、シンポジウムは生涯、勉強の場であると同時に、邪馬台国問題を〈国民全部〉に開放する場でもありました。



邪馬台国シンポジウム
 昭和52(1977)年1月15・16日
 福岡市全日空ホテル



司会の清張は〈参会者の皆様方の代表〉として、専門学者を相手に巧みに議論を「交通整理」し、果敢に挑発し、論争をも「演出」して、聴衆をあきさせずに魅了しました。



吉野ヶ里シンポジウム
 平成元(1989)年7月1日、
 佐賀市で講演する清張。

展示会場で、講演する清張の生の声を聴くことができます。

文庫本

手の中に収まる夢——少年時代の清張にとって、文庫本は、そのような存在ではなかつたらうか。

文庫といえば、わたしの想出はやはり改造文庫と岩波文庫である。改造文庫で眼にうかぶのは鶯色の布装だ。

「特性」※より

改造文庫は、所謂「円本」の火付け役となった『現代日本文学全集』を刊行した改造社が、岩波文庫に対抗して昭和四年に創刊した。清張が書いていくように、小さいながら布張り、宝物のような存在感がある。改造文庫は昭和十九年に廃刊。いまでは稀少な文庫本である。

また、立川文庫というのがある（たかねと読む）。これは、当時の少年たちに絶大な人気があった、講談読物シリーズだった。従来の講談本が、講師師の口演をそのまま速記して作ったのに対し、人物の描写やストーリー運びに工夫と創作を加えたところに特色があり、大衆小説の源流にもなったという。

大人の小説の面白さをはじめて教えてくれたのは「立川文庫」である。これは教科書の下にかくして併読した。今日、僕が近眼になつたのは、親父にその発見される



のを恐れて、暗いところで、小さな文字を凝視したおかげである。

猿飛佐助や水戸黄門の超人的な活躍、波乱万丈の筋、あの軽妙な会話、いつも危険にさらされて危ないところで助かっている美女、それらは少年のころに「小説」の面白さを教えてくれた。『坊ちゃん』『草枕』の面白さを理解するには、この立川文庫の履歴が必要ではなかつたか、とさえ思うのである。

いま、子供たちが食欲に読んでいるスーパーマン式の本をのぞいてみても、あの粗悪な暗い紙にかすれた活字を押しつけた立川文庫の面白さには及ばない気がする。僕らは、立川文庫によって、教科書よりも切実な、そして身近に歴史を学んだような気がする。

「わたしの古典」※より

とりわけ、大正初期に刊行された「猿飛佐助」は、牧野省三監督が、尾上松之助を主役に撮った忍術映画の人氣との相乗効果もあり、「大忍術ブーム」を巻き起こした。立川文庫は、清張と同年生まれの埴谷雄高や大岡昇平も、少年時代に熱中したことを明かしている。ちなみに、文庫ではないが、「新青年」も三人共通の愛読誌だった。

大正期前後の日本では、欧米の文学を盛んに翻訳する一方で、講談や戯作を読物にして、全集や文庫というかたちで安価に提供した。この出版文化の豊かさが、日本近代文学に寄与した点は見逃せない。松本清張も、まさに時代の恩恵に、浴したと言えるだろう。

（※1）「特性」『波』一九七八年四月掲載

（※2）「わたしの古典」『随筆黒い手帖』一九六一年 中央公論社所収

参考文献 足立巻一『立川文庫の英雄たち』（一九八七年 中公文庫）

（専門学芸員 柳原暁子）

作品の舞台を訪ねて

「顔」「球形の荒野」

——京都いもぼう①

松本清張が考古学者である樋口清之氏と共同執筆した『京都の旅今日の風土記』には、「日本人の味覚のふるさと」として京料理を紹介した箇所があり、「いもぼう」もその一つにあげられている。

「いもぼう」とは、「エビイモと棒鱈^{ぼうだち}とを煮つけた料理。京都の名物料理。」（『広辞苑』）というが、清張作品では短編小説「顔」と長編小説「球形の荒野」に登場する。

「顔」が発表されたのは、昭和三十一年八月、「小説新潮」だった。

昭和二十二年六月十八日、井野良吉は、福岡県八幡市中央区（現北九州市八幡東区中央町の酒場の女給、山田ミヤ子と島根県温泉津温泉で一泊し、翌日、山林の中で彼女の首を絞めたが、彼女は殺される前、たまたま出会った酒場の常連、石岡貞三郎に声をかけたため、井野は彼に顔を見られていた。

殺害直後に上京して九年、新劇俳優をしていた井野は、映画に大役で出演する機会を得た。井野は撮影開始前、石岡を京都に誘い出し、殺すことにした。匿名の手紙を受け取った石岡は八幡署に相談し、待合わせの日の昭和三十一年四月二日、刑事二人と京都に来た。石岡の日記には、



いもぼうイメージ
[写真提供: 公益財団法人奈良屋記念杉本家保存会]

次のように記されている。

駅前の東本願寺を振り出しに、三十三間堂や清水寺、四条通りや新京極を見物して歩いた。刑事の一人が時計を出した。「十二時になったぞ。そろそろ腹ごしらえをして駅に行こうか」と彼はいった。「そうしよう。同じめしを食うなら、名物のいもぼうとかいうやつを食べてみたい」（略）こんな話がまとまって、祇園裏の円山公園にある料理屋に行つた。（略）六畳くらいの部屋に通された。其処に一人の男が飯をくつていた。

（文藝春秋『松本清張全集36』より）

この男こそ、石岡を呼び出した張本人、井野良吉、その人であった。この後、話は劇的な展開をみせる。次号へ続く。

（加地尚子）



きよしとハルコの 探検! 清張記念館

B1F “読書室の写真”の巻

きよし この、清張とツーショットの人って、誰だろう。

ハルコ 現代俳句協会会長も務めた、俳人の横山白虹^(※1)。小倉時代から清張と親交があった人よ。でもこの写真の何が珍しいかって、実は昭和39年秋、作家になる前の森村誠一が撮影したからなのよ。

きよし わー! この写真左下の影は森村さんか。貴重な「3ショット」だ。森村さんは最近「写真俳句」で、新しい俳句の魅力を伝えているよね。当時からカメラは趣味だったみたいだな。小説・俳句・カメラ、ルーツを感じさせる1葉だ。



ハルコ 森村さんは勤務先のホテルの

常客だった白虹の元に押し掛け、可愛がってもらっていたそう。森村さんの才能を見抜き、初の著作本を読んだ白虹は「清張に推薦文を貰ってやろう」と、会わせてくれたんですって。

きよし その頃の清張って、長者番付1位の売れっ子じゃない?

ハルコ そう。所詮、超人気作家から見れば、白虹と来た見知らぬ青年。付き人とも思われたか、清張は目もくれない。

きよし じゃあ、推薦文なんて夢のまた夢…。

ハルコ それが貰えたの!

「先生の中で、ホテルの描写にミスがあります!!」
なんとか振り向かせたい、ホテルマン森村青年が放ったまさに起死回生のその一言が、清張の作家魂にヒット。そこから2時間弱、森村さんは清張からホテルについて質問責め。上機嫌になった清張は、森村さんの初作品の推薦文を引き受けてくれたのよ。

きよし ドラマチック! それにしても清張が創作に対していかに貪欲だったかが分かるエピソードだね。

森村氏は平成13年の記念講演会^(※2)で、愛憎入り交じる清張への思いについて、熱弁をふるわれました。写真の影を眺めながら森村さんの気持ちになってみるのも楽しいのでは?

(※1)「館報8号」北九州文学マップ (※2)「館報7号」開館3周年記念講演会
○ほかにも、当時のエピソードは森村誠一「文芸の条件」に詳しく載っています

友の会 活動報告

● 朗読劇『張込み』

■ 4月27日(土) 参加者 135名 記念館 屋外特設スタンド

今年で10回目を迎える劇団前進座による「朗読劇」。清張作品の中でも人気の高い『張込み』を見事な脚本や役者の皆様の熱演、小倉城の石垣をバックにした照明や音響などにより、臨場感溢れる「感動のドラマ」が展開されました。

また、今年は朗読劇終了後、初めて、前進座の皆様との「交流会」を開催しました。藤井館長も参加され、朗読劇の



感想や前進座の皆様との会話などに花を咲かせ、10回記念にふさわしい思い出に残る交流会となりました。

● 清張サロン

清張サロンは毎回、清張作品や清張に関する話題をテーマに設定し、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流を目的に年8回開催しています。なお、第7回は、記念館との共催による「特別講演会」として、友の会会員のほか一般市民にも参加を呼びかけて行われました。講師より、清張や清張作品を深く掘り下げて解説して頂き、とても充実したサロンとなりました。

第6回 3月22日(金) 参加者 25名 記念館 地階会議室

- テーマ：「松本清張の戦争体験」
- 講師：小林慎也氏(梅光学院大学客員教授・友の会会長)

第7回 6月3日(月) 参加者 59名 記念館 企画展示室

- 特別講演会 テーマ：『断碑』の周辺
- 講師：松本常彦氏(九州大学大学院教授)

● 春の文学散歩『砂の器』の舞台等を訪ねて

5月12日(日)～14日(火) 参加者 36名

1日目 雲州そろばん伝統産業会館→亀嵩駅→砂の器「記念碑」・湯野神社→酒蔵奥出雲交流館→「桐原小十郎宅の茶室」→矢戸「文学碑」など

2日目 松江城→小泉八雲旧居・同記念館→武家屋敷→足立美術館→出雲大社遷座前夜祭など

3日目 出雲大社→日御碕灯台→中村プレイス社「記念碑」→石見銀山おもしろ地区など

今回は、『砂の器』の舞台「亀嵩」をはじめ、山陰地方の「作品の舞台」や「清張ゆかりの地」を訪ねました。訪問先では清張さんの人柄を感じさせる心温まる貴重なお話などを伺うことができ、また、60年ぶりの「出雲大社遷座前夜祭」を見学する幸運にも恵まれました。



参加された皆様から「他のツアーでは味わえない中身の濃い企画だった」「思い出に残る旅になった」「多くの友人ができた」などの感想が寄せられました。

● 友の会会員更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、朗読劇、生誕祭、「友の会だより」の発行、館報や記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

また、会員特典として、常設展への招待券や、特別企画展図録・招待ハガキの進呈などもあります。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで
TEL. 093-582-2761

平成25年度
中学生・高校生読書感想文
コンクール

清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親んで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからは担う若者たちに、探求の心・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「ゼロの焦点」(『ゼロの焦点』新潮文庫)

「左の腕」

(『佐渡流人行』新潮文庫、『遠くからの声』光文社文庫、
『遠くからの声』カッパ・ノベルス)

「陸行水行」(『陸行水行』文春文庫、『駅路』新潮文庫)

■応募方法

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要に応じてコピーをおとりください。

■応募締切 平成25年10月31日(木) ※当日消印有効

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区内2番3号
松本清張記念館 感想文コンクール係
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、12月下旬頃、本人と学校に通知し表彰式を行います。

なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1人)

《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 文具(未定)

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)

記念館グッズと図書カード

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」に掲載します。

●主催 北九州市 ●主管 北九州市立松本清張記念館

●協力 モンブランジャパン



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市立中央図書館 勝山公園 ホテルクラウンパレス小倉

松本清張記念館

第15回

松本清張研究奨励事業
入選企画決定

「松本清張研究奨励事業」は15回目を迎えましたが、多様なアプローチの応募企画が寄せられました。選考委員会による厳正な審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

第一線で活躍される入選者も増え、成果の蓄積が清張研究をさらに発展させています。今回の入選企画も、松本清張の活動の幅広さを示し、成果が期待されます。

企画名 松本清張「火の路」と漢魏晋以来「胡印」及び「景教印」等の研究
—— 印章の世界にペルシャ文化とその東漸をよむ ——

入選者 久米 雅雄 (大阪芸術大学客員教授)

奨励金 500,000円

企画名 松本清張の研究

—— 「回想的自叙伝」を中心に、社会教育・自己教育の視点から ——

入選者 福永 義臣 (元九州国際大学教授)

奨励金 450,000円

第16回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

対象 ① 松本清張の作品や人物を研究する活動

② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動

(調査、研究等)

※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体も可。

内容 入選者(団体)に150万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成26年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

●編集後記● 前回企画展「昭和史発掘」には7,000人を超える方々にご来場いただき感謝しております。今からは新企画展「松本清張と邪馬台国」を開催中。どうぞお出かけください。8月4日の開館15周年記念講演会には、松本清張賞受賞作家の横山秀夫さんをお招きします。講演内容は次号に掲載しますので、お楽しみに。夏真っ盛り。本紙面でひと時の涼を感じていただければ幸いです。

(N.K)

